

けいほう 「継方」という人

秋場美知子（故秋場國雄氏夫人）

出羽三山（月山、湯殿山、羽黒山）のおひざもと、作家 藤沢周平記念館のある城下町、山形県鶴岡市曹洞宗のお寺に昭和17年1月11日に生をうける。

庄内平野の前に広がる日本海、その水平線に夕日が沈む瞬間、海面が赤く染まりキラキラ光る様は神秘的で感動さえ覚えました。

そんな歴史ある美しい故郷を主人は生涯愛し続けました。

主人が40歳を過ぎた頃、私は主人に、現役を退いた後好きな事に打ち込んで過ごせるよう、習い事を始めることを勧めました。そうは言っても、一步踏み出すのは難しいものですが、若い頃から美術館めぐりなど美術工芸に興味を持っていたからでしょうか、行動に移すのは意外と早かったように思います。



鎌倉彫 古希を迎えて

NHKカルチャースクールをきっかけに、平成2年鎌倉彫後藤会に入会、鎌倉彫を始める、平成3年漆工芸、漆塗り技法を習う、15年余りの修業を終え、鎌倉彫後藤会宗家より皆伝免許雅号「継方」の名を許される。その後も東京の教室に通っておりました。

鎌倉彫教授会展、那須塩原伝統文化展、共同作品展、個展、工芸二人展、市民美術協会会員として、狭山市民芸術祭に出品しました。

忙しい毎日から少し離れて何を彫るか、漆塗りの仕上げはどのようにするか、図案画をめくり決めかねているように感じられることがありましたが、そんな時には「どれがいいかな」と、私に聞いてきたことが思い出されます。また、心のゆとりがある時、作業部屋に籠り無心で作品に向かい時間の経過も忘れて作業に打ち込んでいたり、小刀の研ぎ出しに何時間もかけ、汗だくになっていたり、そんな時間の中で主人は何を得ることが出来たのか・・・

山の頂上までではなくとも「峠」を目指して、そこに向かって少しでも歩もうと努力していたのかもしれない。

現役を離れてまもなく、時間に余裕が出来たこともあり、自宅に鎌倉彫教室を開きました。お教室では生徒の皆様の笑い声が絶えず和やかに、楽しそうに鎌倉彫の作品を彫られておりました。長い制作活動の合間に、箸や汁椀など多くの漆器を自宅用に作ってくれました。漆器は手の感触もやさしく温もりさえ感じられます。そんな漆器を私は大切に使っていきたいと思っています。

わがままなところもありましたが、病との闘いの中、自然に身をまかせ、ゆったりと過ごし、多くのお仲間と友人に恵まれ幸せな生涯だったと思っています。

ありがとうございました。心より感謝申し上げます。

編集後記

- ★本年1月発行予定の“文化のいぶき”は、年末には編集を終え印刷発注直前でしたが、1月8日からの緊急事態宣言で「芸術祭」「桜まつり」が中止となり、発行も中止。宣言解除により内容を変え、4月発行となりました。
- ★昨年7月に亡くなった常任理事秋葉國雄さんを追悼し、奥様の思い出を掲載。
- ★年末に狭山ケーブルTVの「みんなが主役エールさやま」の収録があり、私も民謡の合唱で出演。全員マスクで唄う初体験でした。専門の先生が、マスク生活はワクチン接種後でも後2年位は必要と。民謡はマスクは困ります。
- ★暖冬で桜の開花が早まり、3月中の満開が普通となりそう。ただ、「桜まつり」は4月が似合いますね。

（高沢正夫）